

Annual Activity Report

2019 - 2020

特定非営利活動法人 寺子屋方丈舎 第20期(2019年10月～2020年9月) 事業報告書



子どもたちに自由、勇気を
特定非営利活動法人 寺子屋方丈舎

第20期 事業総括

今期は、二つの大きな変化に向き合いました。事務所の移転とコロナの影響です。

2019年12月末日に5年間いたレオクラブガーデンスクエアの事務所から大町へ移転いたしました。これまで、1階の事務所で活動することがなかったのでこの変化は大きかったです。多くの人がフリースクールの存在や、子ども食堂の必要性を感じていただいたことだと思います。

木造の建物の1階では、交流スペースとして地域の皆さんへも貸し出し始めました。文字通り交流と創造は一体のものです。市民活動団体だけでは生まれない知恵や視点、価値観がどんどん入ってきました。6月からは会津でもプログラミング教育を進めようとCODA DOJO、SAP（ドイツのIT企業）、藤井靖史（会津大学客員准教授）事業連携を行うことができました。企業寄付としてアクセンチュア、KDDI、SAPからも寄付が寄せられたことは大きな支援になりました。フリースクールは不登校の子どもだけに閉ざされた場所ではなく、誰もが学べる学校外の学び舎であるということも明確にされました。

東日本大震災以降最大の困難は、コロナの影響だと思います。4月から6月までの学校休校期間中は、多くの子どもたちにとってどうしていいのかわからない時間でもありました。会津で感染者が誰もいないに関わらず、休校になり子どもたちは戸惑いを感じていました。そんな中でも、当団体は理事の荒川さんからマスクの提供を受けてスタッフ・ボランティア全員が衛生管理をしたうえで向き合うことができました。

休校期間中は、子ども食堂の利用がととても増えました。年間を通しての利用者数が約倍の数に増えたことが必要性の高さを表しています。子どもたちは、安心と安全が必要だということと、誰かに支えられる経験が必要です。この期間を通じてお互いに学びあえたこと、支え合えたことがとても貴重な経験になっています。子ども達がどんどん増えたにも関わらず、ボランティアさんがなかなか増えずに、スタッフにはとても迷惑をかけました。あらためて感謝とお礼を言いたいと思います。

5月からは、郡山にフリースクールトレーラーを開校させました。郡山地域は不登校がととても多いのに、フリースクールが数少ないという事情をふまえての開校です。現在では徐々に利用者も増えてきたことと認知も広まってきました。同時にオンラインフリースクールを開講させました。福島県内だけではなく、茨城県や奄美大島の子どもも参加しています。

子どもと一緒に学ぶのは、いつも試行錯誤の連続です。おそらくうまく行かないことが多いのです。私たちには、失敗を修正してゆく力があります。失敗しないように時間をかけるのではなく、修正することに時間をかけることでよりたくさんの人の協力と、自分自身の中に学びを蓄積することができます。

多くの不登校の子どもは誰もが、失敗から立ち直ることができないと思い込んでいます。親はそれ以上に、何かを恥ずかしいことだと思っています。不安や恥ずかしさで、自らの歩みや思考を止めてしまうことほど「もったいない」ことはありません。私たちは誰もが有限の時間を生きています。自分自身の歩みを止めないためには、私たち大人が、自らの価値観や願望をいったん置いて、自らを換骨奪胎して考えることが必要だと思います。

自分の中での「できない」と「大丈夫か？」という不安から自由になることが大事なんだと、あらためて実感しています。これからも、自分の殻を破りながら大人自身が成長してゆき子どもとともに学び合いを続けてまいります。



理事長
江川 和弥

事業目的

●フリースクールの目的は、自らの学びと育ちを自分で考える力を身につけることにあります。知識だけをダウンロードして、必要な部分をインストールするような教育は終焉を迎えています。子どもたちが、培った判断力と好奇心から、気づきを深めてゆきます。

私たちは、地域の子どもたちと一緒に学び方を変えてゆくことに努力してゆきます。

●不登校を経験することは、自分で考える思考の世界と出会う場でもあります。問題に気づく→自分で考える→表現する（説明する）ことを重ねてゆくことで自分の学びの成果を表現してゆく

事業趣旨

現在、2000年発表の不登校の小中学生の児童数は18万人を超えました。福島県では2115人で過去最高となりました。（2018年度・文科省の学校基本調査結果）

こども・保護者の孤立やこどもの学習権の保障、教育機会をつくる場として、「フリースクール」は安心を基盤に創発的な学びを実践してゆきます。

第20期をふり返って

こどもミーティングを運営の中心にすえて、プログラムつくって、自ら運営して、ふり返りをおこなうというサイクルをどんどん回してゆきました。プログラムの定着が進み、こども自身の場づくりへの参画が進んでいます。出席率の向上につながりました。

肯定的に関わることが子どもの成長を促しています。

また、親の会の参加者増加により経験者同士での対話が増えています。大人は、不登校の子供と向き合うときにほぼ同じ経験を重ねます。この経験の重なり合いをつくれたときに、保護者はわかってもらえた感情と満足を得ることができます。自分の子どもに肯定的な関わりを持つことが可能になります。もっと保護者をが余白をつくり出せるように、親の会のあり方の多様な可能性をさぐります。

担当
鈴木 篤
大竹 佑佳
小岩 真純

フリースクール

活動の目的

学校に行くいかに関わらず、子どもたちと多様な学びの形をつくり、学びと活動を通して、自己肯定感を育んでゆきます。

月	実施日数	登録人数	参加延べ人数	出席率(%)
10月	22日	11人	69人	29
11月	21日	12人	95人	38
12月	15日	13人	74人	38
1月	19日	13人	93人	38
2月	20日	13人	81人	31
3月	19日	13人	67人	27
4月	17日	12人	78人	38
5月	20日	12人	70人	29
6月	21日	12人	91人	38
7月	21日	12人	88人	35
8月	8日	13人	36人	35
9月	21日	15人	99人	34
合計	213日		941人	34

成果

●プログラムの定着と活動への参画・出席率の向上
昨年度より続く毎週木曜日の飯の会と体育のプログラムには毎回5～7人程度が参加し週の活動の中心となっています。また、昨年度にこども発信で実現したフットサルプログラムと野球プログラムが定着し、事前ミーティングと振り返りを含めたことによる活動への参画の場となっています。

その他、事務所の移転に伴い「自分たちの場を自分たちで作る」活動を実施。自分たちで床のサンダーがけ等の土足禁止作業や黒板の設置・塗装、写真やミーティング記録の掲示板の設置など、場への参画が進みました。フリースクールに通う親子の関係性を豊かにつくっています。夏の親子BBQ(親子16名参加)など課外活動による体験学習も実施。プログラムを通して、こどもの活動への参画が進み、出席率の向上へとつながりました。

●小中学校の出席認定
2019年10月以降、教育委員会との協議を重ね、2020年7月に教育委員会による出席認定ガイドラインが決定。9月以降、小・中学生の出席日数が認定されています。

●こども個別の学習予定・学習時間の確保
こどもごとに学習の予定立てを対話の中で行い、それぞれで定期的な学習の時間が持たれました。その中で、こども同士の教えあい・学びあいが生まれています。

●不登校親の会の実施
「不登校」とは何かを保護者の視点から明らかにしてゆきます。経験者同士での対話である「親の会」を月1回実施。目標の1回あたり8名の参加には及びませんでしたが、今年度初めから徐々に参加者が増加し、ここ数ヶ月では毎回7名前後の参加につながっています。

課題

●登録人数の伸び悩み
2020年10月現在の登録人数は15名、実参加者は12名と、目標の20名には及ばない状況です。目標達成のためには、【募集→見学→利用】の導線の整理が必要です。

まず募集段階にて、

①フェイスブックにて、活動状況の発信を行うことでホームページへのアクセス数を増加させる

②ホームページの整理を行い必要な情報を閲覧者にリーチさせる

③小中高の年代ごとに合わせた説明会を実施する といった方策を進めています。

また、見学から利用への着地率の向上について、

①こどもの不登校のフェーズに合わせた対応方法を策定し、スタッフの相談能力を向上させる

②相談時の面談と体験・見学時のプログラム内容を策定し、相談・見学時の対応の精度を向上させる

という対策を進め、目標達成を目指します。

●出席率の向上

19期全体の25%と比べ大きく伸びてはいますが、目標の40%には及んでいない状況です。月ごとのばらつきに関しては、連休前後の出席率低下や高校生のスケジュールの影響などが考えられますが、定期プログラムへの参画を進めることでカバーする必要があります。また、現在は日利用者が占める割合も多いため、手薄な中学生層の登録者の増加と、その年代に合ったプログラムを策定し、プログラムの定着が見られない曜日をカバーしていくことが寛容です。よって、協働型、体験型の学習の新プログラムの策定を現在進行させています。

フリースクールトレーラー・オンラインフリースクールFukushima 事業部



事業目的

- フリースクールの目的は、自らの対話や経験を言語化して表現してゆくところにあります。自分のステップを自分で理解することを通じて学びを深めてゆくことが目的です。
- オンラインフリースクールでは、フリースクールに通えない、遠隔地からもからも参加できるしくみを構築してゆきます。この活動を通じて、オンラインでも気づきあいや、学び合いができることを試行錯誤しながら実践してゆきます

事業趣旨

現在、不登校の小中学生の児童数は18万人を超え増加傾向にあります。福島県では2115人で過去最高となりました。（2018年度・文科省の問題行動調査結果）
こども・保護者の孤立やこどもの学習権の保障、教育機会の選択肢として学びの場を提供します。

第20期をふり返って

今期5月より両事業開始。両事業とも事前のニーズ調査不足を感じ、利用者登録を1名確保するだけでもかなりの時間を要した。しかし、活動をしていく中で得られた不登校の子どもの課題は共通している。保護者や子どもの意見への仮説をつくり実証してゆくことをくりかえしている。利用者5名到達の目標は概ね達成できた。10名に向けて連携した活動を続けてゆく

担当
小関 翼

鈴木 篤
(オンラインのみ)

フリースクール

活動の目的

- (1) 孤立化防止
- (2) 学校に行くいかに関わらず、子どもたちと多様な学びの形をつくり、学びと活動を通して、自己肯定感と生きる力を育む。

月	実施日数		登録人数		参加人数		出席率	
	トレーラー	オンライン	トレーラー	オンライン	トレーラー	オンライン	トレーラー	オンライン
5月	15日	4日	0名	1名	1名	4名	-	100%
6月	16日	9日	0名	2名	11名	18名	-	100%
7月	16日	7日	2名	2名	16名	14名	50%	100%
8月	6日	0日	2名	0名	9名	0名	75%	-
9月	17日	2日	2名	4名	16名	8名	47%	100%
合計	70日	22日			53名	44名	57%	100%

成果

●周知広報利用登録者の確保

活動実績の無い地域（郡山）での事業ならびにオンラインによる事業において、利用登録者を確保できたことは、1つの成果とを感じる。

●資金集めと広報。クラウドファンディングの成功

フリースクールトレーラーを立ち上げ時にクラウドファンディングを行い、目標30万円に対し40万円の応援があった。同時に、60名の応援者に応援いただき、郡山地域の支援もいたことは地域の認知につながった。

●外部団体との連携

ビーンズふくしま、こおりやま子ども若者ネットとの連携により、相談会を実施関係者への周知から利用につながっている。オンラインでの検索件数も伸びている。子どもを学校制度の外で学ばされる

●取材による周知

両事業とも地方紙の他、日経新聞、不登校新聞、子育てコミュニティによる広報誌などの取材があり、新聞記事の掲載など万人へのアプローチにつながった。

課題

●利用登録人数

トレーラーは定員の5分の1、オンラインは定員の半数以下と、利用登録者は確保できているが持続可能な居場所を運営するには人数が圧倒的に少ない。FacebookとLINEによる情報発信を行い、その経由で興味を持つケースもあるが、安定した掲載ができていない。時期での改善を見据え、引き続きニーズ調査を行いながら開所時間の見直しや、コンテンツの開発など行い、利用料を支払ってでも預けたいと思える価値を見出す。

●学校へのアプローチ

郡山市教育委員会へ挨拶をしていこう、学校へのアプローチを行えていない。現状のスタッフ体制で学校訪問となると、フリースクールを休館せざるおえないので、会津のスタッフに協力依頼し、出席認定も視野にアプローチを開始する。

●家庭へのアプローチ

郡山市内だけでも不登校家庭の8割がどこにも繋がれていないという情報が教育関係者からあるが、不登校家庭につながるアプローチが市の相談機関か、子育てコミュニティしかない。定期的な講演会や相談会、営業活動を実施する。



事業趣旨

非日常の生活、自然を使った遊びや少し不便な環境の下、子どもたちが自立（自分の気持ちを知る）と共生（相手と一緒に何かをつくる）をテーマにお互いが相談しながら生活し、楽しさを感じながら活動することで、子どもたち1人1人の自己肯定感を育みます。

事業目的

学校外の場合（安全で安心できる場）として、子どもたち皆が対等の立場で過ごせる場・純粋にその場を楽しめる場作りが必要であり、子どもの権利条約をふまえ、失敗してから学んでゆく事を大切に、物事に対して再構築できる試行錯誤力が求められています。

野外活動において、「お互いの創発的なアイデアを多層的にまとめながら学びを構築していくことで考えて行動してゆく力」「子どもたち自身が課題があることを不利に捉えずに、自分自身で課題を解決してゆく力」を伸ばしてゆきます。

環境教育では「子どもたちが能動的になる事」を目標にしています。ただ“楽しむ”ことは誰にでも出来ます。自遊学キャンプでは「楽しむことが学びにつながる」「楽しませてもらうのではなく、自分たちで楽しむ」ことを大事にして活動しています。

第20期をふりかえって

第20期も、第19期同様に環境教育事業の1部を合同会社ストローハットに業務委託をし実施しております。これまで会場として使用してきた旧西会津町奥川保育所の使用が2020年5月で終了となりました。第19期は2拠点（旧西会津町奥川保育所と会津若松市民家）で実施してきましたが、第20期は会津若松市民家のみで開催となりました。さらに2020年に入り、新型コロナウイルスの影響を考慮した上での事業実施が続いておりますが、こちらの対策は今後も慎重に実施していかなければなりません。安全安心に楽しく、来季以降も、子どもたちに新しい発見があるような事業を実施していきます。

自遊学キャンプ

活動の目的

自遊学キャンプは「子どもたちが能動的になる事」を目標にしています。
ただ“楽しむ”ことは誰にでも出来ます。自遊学キャンプでは「楽しむことが学びにつながる」「楽しませてもらうのではなく、自分たちで楽しむ」ことを大事にして活動しています。

月日	活動日数	会場	参加延べ人数	ボランティア参加延べ人数
10月12日～14日	2泊3日	会津若松市湊町民家	21人	0人
11月2日～4日	2泊3日		6人	3人
12月25日～28日	3泊4日	西会津町奥川保育所	40人	4人
1月4日～7日	3泊4日		72人	12人
1月11日～13日	2泊3日	会津若松市湊町民家	9人	0人
1月17日～19日	2泊3日		24人	3人
1月24日～26日	2泊3日		21人	3人
2月7日～9日	2泊3日		24人	3人
2月14日～16日	2泊3日		12人	0人
2月22日～24日	2泊3日		39人	6人
3月25日～28日	3泊4日	西会津町奥川保育所	28人	4人
4月1日～4日	3泊4日		新型コロナウイルスの影響により中止	
7月23日～26日	3泊4日	会津若松市湊町民家	28人	8人
8月1日～4日	3泊4日		64人	12人
8月8日～11日	3泊4日		46人	12人
8月15日～18日	3泊4日		68人	12人
8月20日～23日	3泊4日		52人	16人
9月19日～22日	3泊4日		36人	12人
合計	64日		590人	110人

成果

- ・ 口コミによる参加者の増加
過去の参加者による口コミにより、学校や習い事の友人・従兄弟などの新規の参加者が多数見られた。
- ・ 新型コロナウイルスの影響は少なく抑えられた
夏休み期間の利用者人数は例年と変わらず、7月～8月にかけての申込率は85%と昨年と同様の結果となった。予防対策の徹底を事前に周知出来たことが要因ではないかと考えられる。
- ・ 継続したボランティアの確保
昨年から継続的に参加するボランティアを9名確保することが出来た。また、7月～8月の夏休み期間において、2回以上参加する方が3名おり、関わりを継続することが出来た。

課題

- ・ 時期による参加者の増減
夏冬に関しては定員を超える申込を頂いている回が多いが、春秋は極端に少なくなる。（春秋の申込率は40%前後）
- ・ リピーター参加者の減少
7月～8月の夏休み期間はリピーター参加者が全体の2割程度（昨年は4割～5割）となってしまった。次年度に向けて原因を調査してリピーター確保に努める必要がある。
- ・ 継続的なコロナウイルス対策の徹底
今後のコロナウイルスの動向が不透明なことから、事前の対策の周知と、実施中の対策を徹底して実施してゆく必要がある。

自遊学キャンプinいわき

活動の目的

いわき市において、同じ子どもたちが全4回のプログラムに継続的に参加することで、子どもたちの関係性をより深めます。

月日	活動日数	会場	参加延べ人数	ボランティア 参加延べ人数
10月5日～6日	1泊2日	いわき市 湯ノ岳山荘	34人	6人
11月9日～10日	1泊2日		34人	6人
5月30日～31日	1泊2日		26人	6人
6月27日～28日	1泊2日		26人	6人
9月26日～27日	1泊2日		26人	6人
合計	10日		146人	30人

成果

- ・いわき市湯ノ岳山荘で実施するプログラムは本年で5年目を迎えた。参加者の中には毎年必ず参加する方が見られる。特に昨年度の参加者のリピート率が高い。
(5年連続参加2名、4年連続1名、3年連続1名、2年連続4名)
- ・口コミによる参加者の増加
今年度参加者の90%以上が過去の参加者による口コミにより、学校や習い事の友人・従兄弟などの新規の参加者であることがわかった。
- ・継続したボランティアの確保に成功
昨年度からの継続参加1名、5月～9月のプログラムの際には、毎回同じボランティア3名が参加している。

課題

- ・定員の確保
定員15名に対しての参加申込人数は13名となった。またリピーターの参加率は高いものの(13名中10名がリピーター)新規の参加者は少ない。またリピーターも高学年が多いことから、新規の参加者(特に低学年)を獲得していく必要がある。
- ・プログラムのマンネリ化
5年間継続的に使用している施設ではあり、使い慣れしているのだが、新しい遊びが生まれにくい状況が続いている。公共施設であるので、施設に手を加えることが出来ないため、ソフト面でのプログラム開発が次年度は必要になってくる。

第20期 子ども事業報告

会津若松市 相生・城西・飯寺・大町（※6月～）地区 4箇所合算

活動の目的

継続的に、自分たちでつくる食事とおして仲間との共感や料理をしたことで得られた発見から、自主性と共に自己肯定感や感性を育みます。
困難を子どもたちと解決しながら、話し合いをつうじて学びを蓄積してゆきます。

成果

- 第20期の利用者は延べ1769人（233回実施）。第19期の926人（166回）から比較すると1.9倍に増えた。それに対し、ボランティア参加延べ人数があまり大きく変わらない（457人→489人）。継続して利用していることも同士の関係性が強くなっているのではないかと推測する。
- コロナ渦の一斉休校中（3月～5月）は会津地方では感染者が少なかったため、「こどもの居場所」を優先し、保護者にも説明や署名をいただいたうえで運営をした。（公共施設を除く）
- 休校中の利用者が増えたことから、学校外の居場所のニーズがある事が読み取れる。（その後も、感染症拡大防止対策を徹底しながら継続している。）
- 学校外の居場所ニーズから、2020年6月より1ヶ所増やし（大町）、市内4ヶ所週6回となった。
- 夏休み中（8月）はキマチケを配布し、市内の飲食店で食事ができるシステムを作った。利用があったことから、潜在的な利用者がいることを把握した。
- 公式LINEを導入し、保護者や地域の方をはじめ寄付の方とも気軽に連絡が取れる環境を作った。

課題

- ボランティアの継続参加、教育が課題である。
- 3月4月に伴う卒業や異動、5月以降はコロナの影響により、ボランティアの数が減少傾向にあった。ボランティアの再募集と継続性を高めるための日常的なミーティング、が必要。

月	19期 参加延べ人数と 回数	19期 ボランティア参 加延べ人数	20期 参加延べ人数 と回数	20期 ボランティア参 加延べ人数
10月	70人 (14回)	56人	165人 (22回)	55人
11月	57人 (13回)	31人	143人 (22回)	49人
12月	48人 (9回)	34人	117人 (18回)	39人
1月	55人 (11回)	40人	109人 (18回)	40人
2月	48人 (15回)	46人	106人 (18回)	40人
3月	72人 (14回)	37人	171人 (19回)	58人
4月	57人 (9回)	34人	144人 (19回)	46人
5月	142人 (21回)	50人	146人 (15回)	30人
6月	94人 (20回)	35人	195人 (22回)	38人
7月	117人 (15回)	23人	237人 (26回)	35人
8月	26人 (5回)	16人	59人 (8回)	13人
9月	140人 (20回)	55人	177人 (26回)	46人
合計	926人 (166回)	457人	1769人 (233回)	489人

2020寺子屋方丈舎夏休みお弁当提供プログラム

Foresight in sight

- 目的

コロナウイルス感染症の影響で、家族が影響を受けて多忙化していることも
たちに夏休み期間中の食事の提供を行う。地域全体でこどもを支える仕組みづくり。

期間：2020年8月1日～31日

お弁当提供価格：550円（10軒）

対象：会津若松市内に在住する小・中学生

提供食数：1,000食

財源：キューピーみらいたまご財団、寄付

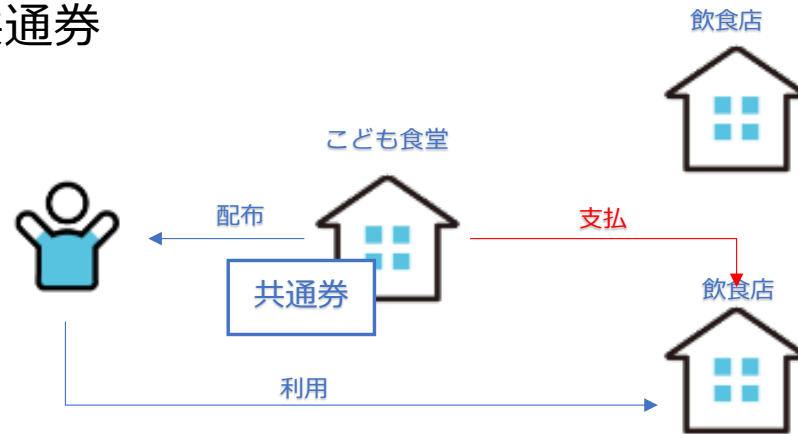
事業主体：寺子屋方丈舎

協力：日本ユニシス、会津の暮らし方研究所

食事券の提供形態（共通券/個別券）

Foresight in sight

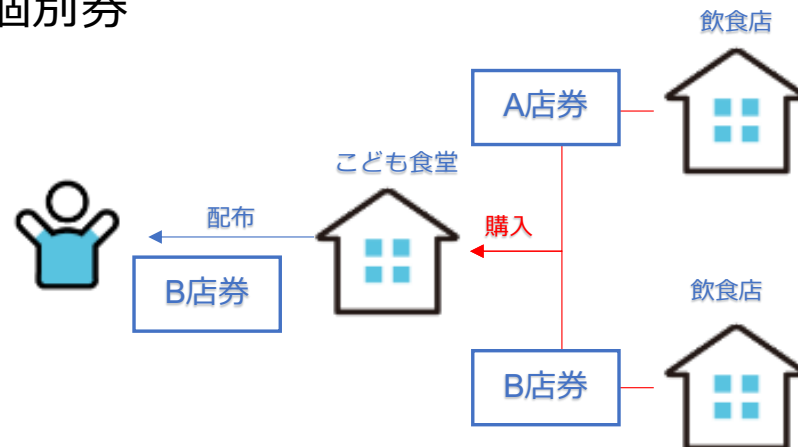
• 共通券



共通券発行者：こども食堂
共通券加盟店：飲食店

利点：飲食店の発行作業なし
欠点：提供メニュー区別なし

■ 個別券



個別券発行者：飲食店
個別券購入者：こども食堂

利点：提供メニュー区別あり
欠点：飲食店のメニュー登録負担
こども食堂の配布仕分け負担
→誰にどの店の券を渡す

放課後居場所 長期休業の居場所

活動の目的

遊びを通して感じられる「気づき」を大切に、子どもたち同士が、協力しながら主体となって遊びを考え発展させてゆく、子どもの主体性を大切にした活動を実施しています。

月	実施日数	参加延べ人数
10月	19日	29人
11月	18日	31人
12月	15日 (+長期休校中：2日)	26人 (+長期休校中：1人)
1月	17日 (+長期休校中：2日)	30人 (+長期休校中：2人)
2月	18日	30人
3月	2日 (+長期休校中：13日)	4人 (+長期休校中：40人)
4月	18日 (+長期休校中：3日)	19人 (+長期休校中：6人)
5月	18日	16人
6月	22日	31人
7月	14日 (+長期休校中：7日)	21人 (+長期休校中：7人)
8月	3日	2人
9月	20日	26人
合計	184日 (長期休校時含めると、211日)	265人 (長期休校時含めると、321人)

成果

●コロナ休校時も、大熊小学校もあまり休まなかった。学童保育を実施。フリースクールの子どもたちと一緒に、近くの公園で体を動かしたり、一緒に料理をした。特に3月4月、異年齢交流が深まった。

●フリースクールの子どもたちとの交流により、昨年よりも、こどもたち発の「やってみたい過ごし方」が増えた。(お菓子作り、イラスト描き、宿題を一緒に考えてもらう、等)

課題

●子ども食堂やその他の事業（プログラミング）等の参加。子どもが何を望んでいるのかを理解しながら、こどもとの学びを深めていく。

●大熊町の学童利用希望人数が少なくなってきたため、予算は減少傾向にある。しかし、少数ではあるが長期居場所の強いニーズもある。対応できる人件費の確保等が必要である。



子どもたちに自由、勇気を

特定非営利活動法人 寺子屋方丈舎

〒965-0041 福島県会津若松市大町1-57紀州屋

FAX : 0242-85-6863 TEL : 0242-93-7950 MAIL : info@terakoyahoujyousha.com

営業時間：火曜日～土曜日 10:00～18:00